

保育者養成におけるピアノ弾き歌い学習支援の検討

平山 裕基

(本講座大学院博士課程後期在学)

Piano Playing and Singing Learning Support in Childcare Personnel Training

Yuuki HIRAYAMA

Abstract

The purpose of this study was to explore support for learning piano playing and singing. Institutions that have programs for cultivating prospective childcare personnel have conventionally provided their students with learning support for piano playing and singing as a primary means of helping them improve their music skills, which are required in their prospective workplaces. The piano training at these institutions, however, has various problems that have yet to be solved. To better understand what kind of piano playing and singing instruction is actually provided for students at these institutions and the students' attitudes, a survey was conducted among 15 students studying early childhood education at the author's junior college. Participants had an average of 5.6 years ($SD=4.59$) piano playing experience prior to admission. The results showed that students are failing at piano playing and singing because they have trouble finding effective ways to control their mental strain. Additionally, it is necessary for teachers to help their student succeed by providing appropriate feedback. The survey results suggest that whether they are experienced piano players or novices, all students should be provided with support that not only addresses their technical skills for piano playing and singing but also their psychological skills to control their mental strain.

1. はじめに

保育者養成課程において、ピアノ実技指導や弾き歌い指導は必須であり、指導を受ける立場にある学生にとっては、将来、保育者として実際の保育現場で生かすことのできる演奏技術の習得が求められる。そして、ピアノ弾き歌いに関連する演奏技術は、日々の保育の中で行われる音楽活動の際に必要な技能であるだけでなく、保育士（保育士資格）試験や幼稚園教諭の採用試験における音楽実技（e.g., 若菜ら, 2006）の場面と直結するため、学生にとっても演奏技術の習得は欠かすことのできない身近な問題であり、重要度の高い課題であるといえる。しかしながら、保育者養成機関におけるピアノ実技指導や弾き歌い指導では、多くの学生に対する十分な指導時間が確保されているとは言い難く、1度の授業の中での1名あたりの指導時間を考えると、本当に限られた時間の中で実技指導を行わなければならないという現状（e.g., 中平ら, 2012）がある。そのため、短い指導時間の中でいかに学生の能力を向上させることができるかが、多くの指導者にとって重要な課題となる。また、現在、筆者が非常勤講師として勤務しているS女子短期大学保育学科では、ピアノが苦手でも子どもが好きな人に保育者を目指して欲しいという思いから入試でピアノ実技試験を実施していない。したがって、ピアノが苦手な学生から得意な学生まで1人ひとりのレベルに応じたレッスンを心がける必要があり、実習や就職後でのピアノを用いた活動に備えることを意図した指導を行わなければならない。

以上のことから、保育者養成課程におけるピアノ実技指導や弾き歌い指導では学習の効率性が求められ、

それに応じた指導法や、授業以外での学生の練習効果を向上するための学習支援を検討する必要がある。本稿では、実際に保育者養成課程の学生が自身の取り組みに対する振り返りを通して、どのような点が課題であり、どのような学習支援を必要としているのかを探り、求められる今後の課題を明らかにすることを目的とする。

2. S女子短期大学保育学科におけるピアノ実技指導や弾き歌い指導の実際

2-1. 1 専門教育科目「音楽Ⅰ～Ⅳ」

S女子短期大学保育学科では、短大2年間を通じて専門教育科目「音楽Ⅰ～Ⅳ」の授業があり、それらの授業では、ピアノのレベルや音楽経験に合わせて少人数のグループに分かれて、それぞれのグループに対して教員が1人ずつ配属される。ピアノの苦手な学生から得意な学生まで、1人ひとりのレベルや進度に合わせた個別レッスンを行っている。1グループあたりの学生の人数は7～8人であり、単純に1度の授業の中での1人あたりの指導時間は15分にも満たない。

さらに、2年生「音楽Ⅲ～Ⅳ」の授業では前半の授業時間（約30分程度）を使用して歌唱指導に関する模擬授業を行っており、クラス全体に対して学生が輪番で歌唱指導を行う。そのため、歌唱指導後の各グループにおける個別レッスンでは、さらにピアノ実技指導や弾き歌いの指導時間が限られる。したがって、授業の中での学習の効率性、それに応じた指導法、そして何よりも授業以外での学生の練習効果を向上するための学習支援が求められる。

2-2. ピアノ弾き歌いのレッスン内容について

ピアノ弾き歌いのレッスン内容に関して、基本的には『こどものうた200』、『続 こどものうた200』の曲について、弾き歌いのレッスンを行っている。その他の楽譜による弾き歌いのレッスンやピアノ独奏曲のレッスンに関しては、各担当教員との相談に応じて取り組んでいる。

各担当教員がレッスンで使用する音楽演習室（4部屋）の他に、学生が練習で使用できる音楽実習室（ピアノ室；24部屋）がある（図1）ため、学生は授業時間中に音楽実習室で個人練習を行い、1人ずつ音楽演習室にて個別レッスンを行うといった授業形態をとっている。学生が練習で使用できる音楽実習室については、学生の人数と音楽実習室の数を考えると比較的充実した環境が整っているといえる。

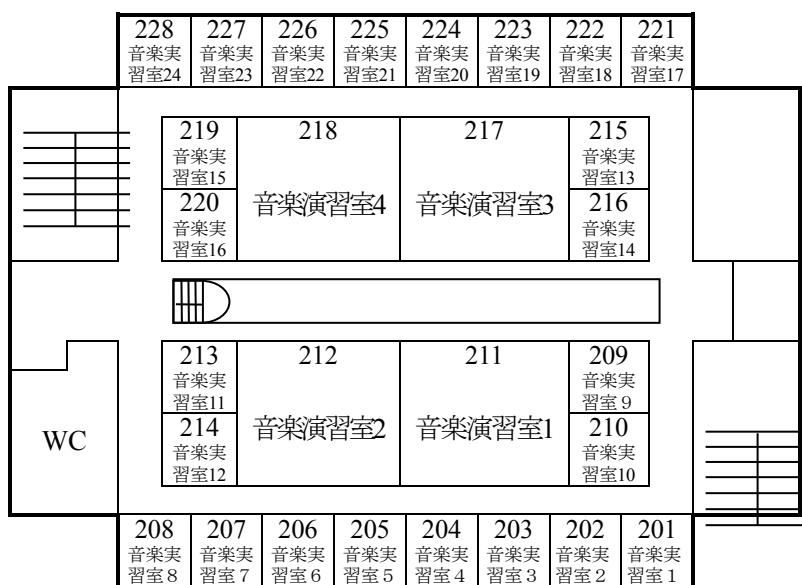


図1 音楽演習室および音楽実習室の配置 (E棟2F)

また、学生に対して初回の授業ガイダンス等で伝達される専門教育科目「音楽Ⅰ～Ⅳ」における授業の目的は以下のとおり（表1, 2）である。

表1 2年間のピアノ独奏／ピアノによる弾き歌いに関する目標

- | |
|--|
| <p>(1) 一度も止まらずにかつ音楽的に、自分の音楽の実力に合った以下の曲・楽譜を演奏（ピアノ独奏／ピアノによる弾き歌い）できること。</p> <ul style="list-style-type: none">・自分自身の音楽の実力に合ったクラシック曲（例えば、バイエル 5～10 曲以上、ブルグミュラー1～5 曲以上、ソナチネ・ソナタ 0～3 曲以上）
⇒ 下記の曲を演奏する基礎になる。保育者の採用試験で必要になる場合もある。・季節ごとに子どもの歌各 3～5 曲以上、季節に関係ない子どもの歌 5～10 曲以上（楽譜の種類は問わない）
⇒ 実習や保育現場では、上記の曲目・曲数を演奏できることが求められる。 <p>(2) 知らない曲を1人で練習して、自分だけの力で正確にピアノ独奏／ピアノによる弾き歌いができるようになること。</p> |
|--|

表2 レッソンの目的

- | |
|---|
| <p>(1) ピアノを弾いたり歌ったりすることを好きになること（(人前で演奏することに) 抵抗感をなくすこと）。</p> <p>(2) 継続的に練習する習慣（できる限り毎日、1回30分～1時間以上）をつけること。</p> <p>(3) 自分自身の音楽の実力に合った曲をピアノ独奏／ピアノによる弾き歌いができるようになること。なお、演奏できる曲目・曲数については、上記の目標にできる限り近づけること。</p> <p>(4) 音楽の知識や読譜力（楽譜だけを見て演奏できる力）を習得すること。</p> |
|---|

これらの内容から鑑みると、学生にとって自身のピアノ弾き歌い学習を進めていく上で、まず「一度も止まらずにかつ音楽的に」、「1人で練習して、自分だけの力で正確に」演奏できるようになることが明確な目標となる。さらには、レッスンの目標として「人前で演奏することに抵抗感をなくすこと」、「継続的に練習する習慣をつけること」、「音楽の知識や読譜力の習得」など、技術的な演奏能力の向上だけでなく、人前で演奏する際の心理的な表現能力や、個人練習における自律的な学習態度の育成など、学生が習得した演奏を人前でも発揮できる力、日々の取り組みの中で自ら学び自ら考える力についても重視されている。

3. 学生による授業アンケートからの学習支援の省察

現在、筆者の受け持っているS女子短期大学保育学科の学生（15名）に対して、自身の取り組みに対する振り返りとして「音楽Ⅲ」（2年生前期）の授業アンケートを実施した。実際に筆者の担当グループの学生にとって、ピアノ弾き歌い学習に関してどのような点が課題であり、どのような学習支援を必要としているのか検討する。

3-1. 調査対象および時期

調査対象：S女子短期大学保育学科に在学中の学生15名（2年生：筆者担当グループ）、入学時における鍵盤楽器の平均経験年数は5.6年（範囲：0.6～14年、 $SD=4.59$ ）であった。

調査時期：2016年7月28日（Bグループ：8名）

2016年7月29日（Aグループ：7名）

3-2. 調査方法

S女子短期大学保育学科「音楽Ⅲ」（2年生前期）の実技試験終了後に、授業に関する自身の取り組みに対する振り返り、調査の直前に実施された実技試験の振り返りとして、アンケート調査を実施した。

4. 結果と考察

4-1. ピアノ実技や弾き歌いの必要性

まず、学生のピアノ実技や弾き歌いについての必要性を探るため、学生の目指す取得免許（複数回答可）および、その職業におけるピアノ実技の必要性に関する問いの結果を示す。その結果、グループの学生全員が保育士（14人）または、幼稚園教諭（8人）の免許取得を目指しており、ほぼ全員（14名）が、自身の目指す職業におけるピアノ実技の必要性を感じていた（図2, 3）。

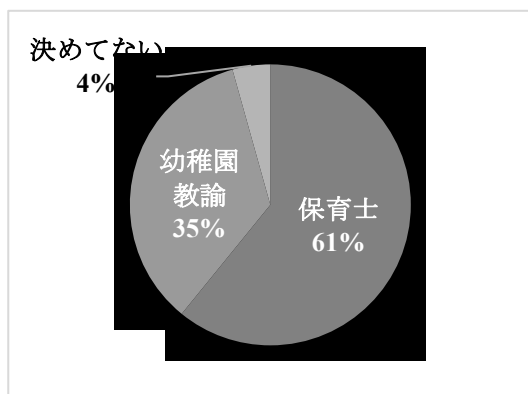


図2 学生の目指す取得免許

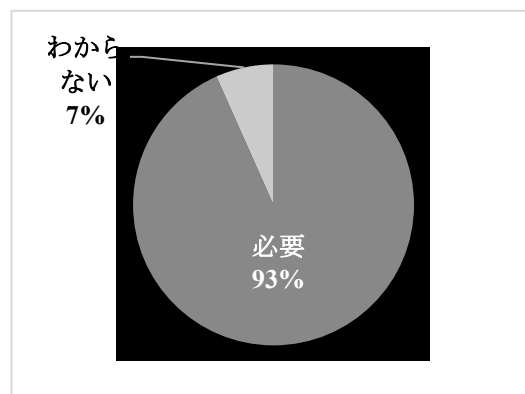


図3 ピアノ実技の必要性

4-2. 学生の普段の個人練習について

学生の普段の個人練習における実態を把握するために行った問いの結果を示す。週に2～3日の練習（11人）を行っている学生が多く、1日の練習時間と比較すると、10～30分までの比較的短い練習時間の中で週にピアノに触れる機会を増やしている学生や、週に1日の練習ではあるが1時間の練習時間を取っている学生など、個人によってばらつきがみられた（図4, 5）。

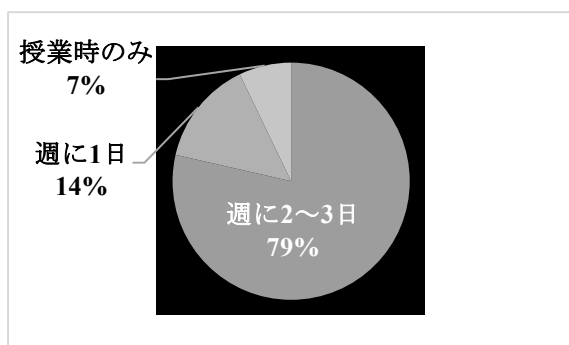


図4 普段の練習頻度

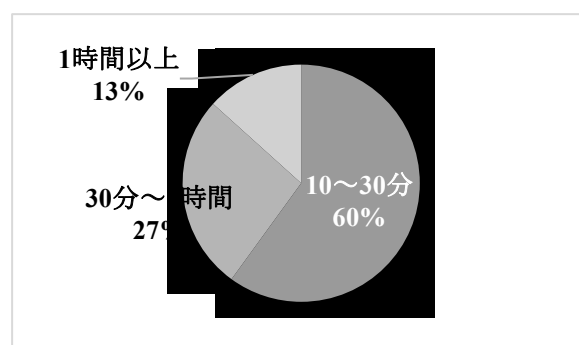


図5 普段の練習時間

今回、本稿の調査を行った「音楽Ⅲ」（2年生前期）の期間は、学生にとっていちばん授業数が多く、また、保育実習も重なっている期間であることから、忙しさという面に関しては他の期間と比較しても確実に多忙であることが予想されるため、調査結果のように短い練習時間の中で週にピアノに触れる機会を増やしている学生が多く見られたと考えられる。したがって、この結果を把握した上で指導者としては学生に対して練習時間の確保を促す必要性があることは言うまでもないが、限られた時間の中でいかに効率的な練習方法を提示できるかといった、学生の実態に即した指導が重要になるといえる。

4.3. 個別レッスンの内容に関する課題

次に、授業における個別レッスンの内容に関する課題について探るため、学生に対して自由記述による調査を行った。調査内容として、「効果的だと感じた指導内容について」、「指導内容の改善点について」、

「その他の気づきについて」に関する回答を学生に促した。この結果から読み取ることのできた課題を示す(表3)。

表3 個別レッスンの内容に関する課題

模範を示す(息の使い方, 歌い方, 弾き方など)
学生との距離感(質問のしやすさ, 一方的な指導にならない)
改善点の提示(指の形, 指番号, 練習方法など)

個別レッスンの内容に関しては、大きく3つの点について今後にかかしていきべき課題が見られた。まず、模範を示すという点であるが、実際に学生の回答からは「見本を見せてもらえることである程度のメロディーがわかりやすい」、「息の使い方や、歌い方、弾き方などの手本を見せてくれる」などの記述が見られた。このように限られた指導時間の中で効率の良い方法の1つとしてはモデリング学習¹⁾がある。モデリング学習には視覚モデリング、聴覚モデリング、運動感覚モデリング、そして、熟達者モデリング、学習者モデリングなど様々であるが、実際に言語的に教授するだけでなく、このような言語的な指導方法とともに視覚的な模範を示すことで、学習者は課題遂行に関するスキーマ²⁾を形成しやすくなると考えられる。

学生との距離感や改善点の提示に関しては、「質問が聞きやすかった」、「自分に合った練習のやり方を教えてもらった」、「指使いなど試行錯誤しながら考えてくれた」などの回答が得られた。これらの内容に関しては、学生に対するフィードバックの役割を適切に理解する必要がある。情報を還元する、戻してあげるといった意味をもつフィードバックには、主に動機づけ、情報の提供という役割が存在する。学習者の行った行動に対する事実を述べる(e.g., 指番号が間違っているよ、テンポが速くなっているよ)記述フィードバックや、実際にどうすればよいのかといった処方的なフィードバックとして指示フィードバックがある。また、フィードバックは詳細に与えた方がよいのか簡潔に与えた方がよいのかという問題もあるが、学習者の熟達度に応じた注意の容量(attention capacity)を考慮して、基本的にはフィードバックは学習者がオーバーフローしないよう簡潔に与える方が効果的であると言われている。ただし、フィードバックを過度に迅速、頻繁に与えすぎると学習者は外的フィードバックへの依存性を高め、自身の内的フィードバック情報の処理を抑制してしまう(ガイダンス仮説)³⁾ので、指導者は注意が必要である。

したがって、指導時間の限られている授業時間内の個別レッスンでは、むしろ学生にとっては授業時間外の個人練習での取り組みが重要になると考えられるので、なるべく外的フィードバックに依存させない範囲に留めるよう指導者は考慮すべきである。実際に効果的な外的フィードバックの与え方として、学習者が自ら誤差推定を行った後、動作の修正に必要な情報を簡潔に与えること、すなわち、学習者の自己評価能力を向上させることが学習の促進につながると考えられる。

4-4. 今後のピアノ弾き歌い学習支援に向けて

今後のピアノ弾き歌い学習支援に向けて、これまでに述べた学生の普段の個人練習における実態や授業内の個別レッスンの内容における課題だけでなく、実際に実技試験に向けて学生が習得した演奏を人前でも発揮できる力についても考える必要がある。学内の実技試験だけでなく、保育士(保育士資格)試験や幼稚園教諭の採用試験における音楽実技の場面、さらには、学生が積み重ねてきた演奏技術を実際の保育現場において生かすためには、それまでに習得してきた演奏を人前で十分に発揮できた方がよいことは明確である。実際に学生に対して調査を行った「音楽Ⅲ」(2年生前期)の実技試験直後の自己評価に関する問いの結果を示す(図6, 7)。

この結果からも、実際に実技試験では普段よりも実力が発揮できなかつたと感じる学生が多く(11人)、その原因としては本番での緊張や不安のコントロールがうまくできなかったかどうか強く影響していると考えられている学生(11人)が多かった。

したがって、これまで述べたように、指導時間の限られている授業時間内の個別レッスンでは、学生にとって授業時間外の個人練習での取り組みが重要になると考えられるので、個人練習における自律的な学習態度や、日々の取り組みの中で自ら学び自ら考える力の育成を念頭に置いた学習支援が必要であること

は言うまでもないが、実技試験直後の自己評価から見える学生の実態として、これまでに習得した演奏を十分に発揮するために、やはり、本番での緊張や不安のコントロールなど、人前で演奏する際の心理的な表現能力の育成についても考える必要があるといえる。実技試験などの本番における過度の緊張などによる、いわゆる“あがり”に関して「練習が不足していた」と練習量の不足にその原因を帰属する演奏者も存在する（e.g., 平山, 2016）が、確かに技術的な練習の反復による技術面の向上は心理的な側面にも影響を与えることがいえるものの、このような「自分に自信がつくまで練習する」など、単純な練習量の増加に依存する練習方法は、遂行行動の達成（成功体験）による影響から自己効力感（自信）が高められた状態⁴⁾にすぎず、練習の量だけでなく、練習の質に関する具体的な「練習が不足していた」内容について指導者は検討する必要がある。

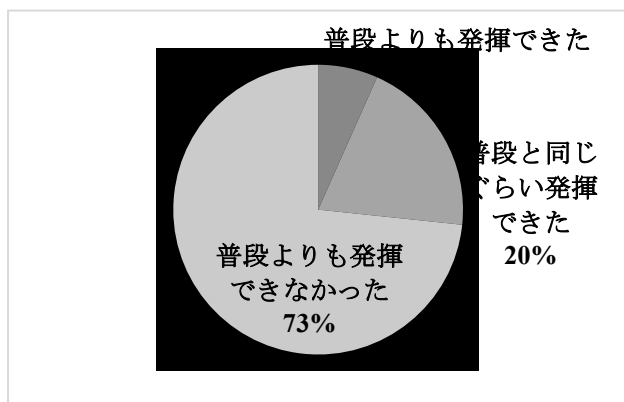


図6 試験でどれくらい実力を発揮できたか

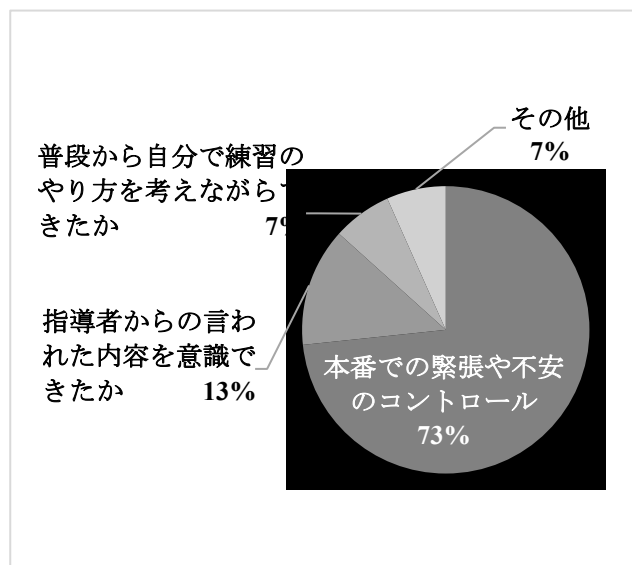


図7 試験で実力を発揮できなかった原因

5. おわりに

本稿では、学習の効率性が求められる保育者養成課程におけるピアノ実技指導や弾き歌い指導に関して、学生が自身の取り組みに対する振り返りを通して、どのような点が課題であり、どのような学習支援を必要としているのかを探り、求められる今後の課題を明らかにすることを目的とした。

実際にピアノ弾き歌いのレッスンの中で求められる内容については、まず「一度も止まらずにかつ音楽的に」、「1人で練習して、自分だけの力で正確に」演奏できるようになることが明確な目標となり、さらには、技術的な演奏能力の向上だけでなく、学生が習得した演奏を人前でも発揮できる力、日々の取り組みの中で自ら学び自ら考える力についても重視されていることが見受けられた。

指導時間の限られている授業時間内の個別レッスンでは、学生にとっては授業時間外の個人練習での取り組みが重要になると考えられるので、なるべく外的フィードバックに依存させない範囲の学習支援に留めるよう指導者は考慮すべきであり、実際に効果的なフィードバックの与え方として、学習者が自ら誤差推定を行った後、動作の修正に必要な情報を簡潔に与えること、すなわち、学習者の自己評価能力を向上させることが学習の促進につながると考えられる。そして、学生が習得した演奏を人前でも発揮するためには、本番での緊張や不安のコントロールなど、人前で演奏する際の心理的な表現能力の育成についても考える必要があるといえる。したがって、ピアノ弾き歌いに関する技術指導とともに、学生への心理的な側面に対する学習支援も必要となる。

これらの観点を踏まえて、個々の学生に対して1人ひとりのレベルに応じた適切なレッスンを行っていくために、今後、さらなる効果的な課題解決を目指した実践的かつ具体的な学習支援について探っていききたい。

注

- 1) 他者の運動スキル遂行過程を観察することによって学習を促進させる方法をモデリング (modeling) または観察学習 (observational learning) と呼ぶ。社会的認知理論 (social cognitive theory) において提唱されたこのモデリング理論は、観察された行動が認知的にコード化され、記憶に保持されることによって、行動の発現に結びつく過程を説明するものである (関矢, 2006)。
- 2) スキーマ理論 (schema theory) とは、認知心理学において実験的な根拠をもつ運動学習の理論的概念である。過去に経験した正しい運動によって形成された知覚痕跡や記憶痕跡に相当する機能をもつ要素として、再認スキーマ (recognition schema) と再生スキーマ (recall schema) を想定し、内面化される基準や、運動の実行を指令する運動プログラムが、抽象化された一種のルールとして形成されると考える。この再認と再生のスキーマとの関連によって運動学習における運動反応スキーマが示され、運動反応スキーマは運動経験の正の関数として確立されるとともに、運動の多様性 (variability) の関数でもあることが導かれており、多様な運動経験をもつほどスキーマが形成されやすいということになる (杉原, 1987)。
- 3) ガイダンス仮説 (guidance hypothesis) によれば、付加的フィードバックは習得において正しい方向へ導いてくれるガイドとなるが、もし付加的フィードバックが頻繁に提示されすぎると、学習者が付加的フィードバックへの依存性を高めすぎてしまうという依存性生産効果をもち、付加的フィードバックが与えられない条件においてパフォーマンスを維持できなくなる (関矢, 2006)。
- 4) 自己効力感は自然発生的に生じてくるものではなく、自己効力感に影響を与える情報源として、遂行行動の達成、代理的経験、言語的説得、情動的喚起の4つがあげられる (松本, 2008)。

引用・参考文献

- 平山裕基 (2016). 演奏者の“あがり”に関する原因帰属の探求：大学生を対象とした計量テキスト分析. 音楽学習学会第12回研究発表会口頭発表資料.
- 松本裕史 (2008). 自己効力感 (self-efficacy). 日本スポーツ心理学会編, スポーツ心理学事典 (pp. 251-253). 大修館書店.
- 中平勝子, 赤羽美希, 深見由紀子 (2012). ピアノ弾き歌い教育の質保証. 日本教育工学会論文誌, 36 (3), 291-299.
- 関矢寛史 (2006). 運動学習における付加的情報と注意. 麓信義編, 運動行動の学習と制御：運動制御へのインターディシプリナリー・アプローチ (pp. 123-147). 杏林書院.
- 杉原隆 (1987). 最近の運動学習理論. 松田岩男, 杉原隆編, 新版運動心理学入門 (pp. 134-141). 大修館書店.
- 若菜直美, 高橋由季子, 西村範子, 磯田由紀子, 酒井由美子 (2006). 短期大学保育科における初学者・初心者のためのピアノ指導法の改善：専任講師・非常勤講師の協同・協奏の試み. 文化女子大学室蘭短期大学研究紀要, 29, 5-22.